

沖縄の「シマ社会」

—地域福祉活動促進の条件を探る—

矢口 雄三

"The Shima-shakai", Okinawan small scale regional community, and a community-based social services.

Yuzoh YAGUCHI

要旨：沖縄県人は他者にたいして温かく接し、県内ではもとより、小地域社会ではつよい協力・協働・連帯でむすばれている。高齢者・障害者にたいする配慮も深く、困難をかかえている他者にたいしては自分の困難をさしおいても、ためらうことなく手をさしのべるなど、小地域社会での連帯・共生の念が一貫している。小地域社会を基盤とする在宅福祉サービスの充実が求められている現在、また住民主体の原則にもとづいて地域社会を再建していくためにも、これら沖縄の小地域社会（シマ社会）にみられる連帯・紐帯の複合的要因を考察・分析することを通して、そこから教訓をひきだすことができよう。この複合的要因のうち、まずシマ社会に焦点をあてて考察した。

キーワード：シマ社会・「シマ語れー会」・共同店

Summary: This article examines and analyzes issues on the circumstances of a small scale regional community, by focusing on the cultural aspect in the "Shima-shakai" of Okinawa.

As a result, some precepts will be found to make our new welfare society through the research of "cultural complex" in Okinawa Prefecture.

There a "Cosmos" has been created in each small scale regional community based on compound and traditional cultures, then it has been making the Okinawan-mind: cooperation, collaboration and solidarity.

Now at need of full welfare society, community-based social service system is strongly required, therefore this example in "Shima-shakai" of Okinawa will give important precepts to new trend of social welfare services of Japan.

美奈さん——、お返事が遅れて、まことに申しわけありません。あなたは、この夏に初めて沖縄の地を踏まれて、人びとの心の温かさと協力・協働のつよさに驚嘆し、なんとかその謎を解きたいと考えて、お手紙をお寄せになりました。ほくは1968年2月「日本政府技術援助計画」の講師として初めて彼の地の、あの固い土を踏みしめて調査や講演をしたり、各地の地域住民との懇談会に参加した結果を総理府南方地域特別連絡局と「琉球政府」に報告、必要な提案・助言をしました。また各地の社会事業研究会のメンバーと懇談・懇親する機会もえて、それらの席で、それぞれの地域の芸能にも接しました。驚いたことに、それらの

芸能を演じたのは役場の係長や保健婦などのみなさんで、その道のプロではなかったのです。いたるところでみたものは凄惨な沖縄戦の爪跡でしたし、「軍事基地のなかにある沖縄」の姿でした。受入れ組織の人に県内各地を案内され、公私の社会福祉活動に関する説明も受け視察しましたし、筆舌に尽し難い沖縄戦と異民族支配の日々についての話に胸をうたれましたが、それ以上に教えられたことは、この島が慈しみ育ててきた歴史・民俗・慣習・里諺などを包含する「複合的文化」の諸相でした。戦後の「ゼロからの出発」を強いられたシマンチュ（地域住民）が、民族的な誇りを失わずに生きつづけた「底力（スクヂカラ）」と、それらの地域文化を根底から支ええた、まことの「互助活動」の教訓でした。

ですから以来30年近い歲月、沖縄の書籍を読み調べ、県内各地を歩きまわって、このシマの人びとが体験してきた300年余にわたる難儀を知れば知るほど、「肝苦りさん（チムグリサン＝他人の痛みを己の痛みとする）」の心を心として、地域福祉論や地域福祉文化論という課題に、ほくは没頭するようになったのでした。

そこでほくが読書やフィールド・ワークを通して感得してきたことを述べることにしましょう。それで、あなたの疑問のすべてを解明できるか否か、自信のほどはありませんが、沖縄の地域社会の特質について解明しながら、あなたの疑問に少しでも応えようと思います。

1. 「シマ社会」とは

沖縄の地域社会には独自の秩序が支配していると、ほくは考えています。それは「シマ社会」の規律であり、秩序です。沖縄の方言——ほくは「方言」という表現を使うことに激しい抵抗を感じるものですから、「地域語」といいたいのですが、ここでは常識的表現としての「方言」を使いますが、それを使っても「地域語」という本来的な意味合いで使っていると、ご理解ください。

沖縄方言の「シマ」は文字通りの「島」を意味するばかりでなく、村落をも意味します。村落をさす言葉としてムラとならんでウラ、クダ、マキョ、サトなどがあります。ウラとサトは理解するに困難はありませんね。シマはムラよりも古い用語であるといわれ、16世紀から編纂されてきた「日本のオデッセイア」、あるいは「ユーカラ」ともいべき独自の叙事文学（詩）ともいわれる『おもろさうし』のなかでは、シマはクニと対句的に使われています。クニは陸地という意味が含まれるので、クニと対句をなす場合のシマは、村落の意味より「島」の意味がつよいようです。村落としてのシマは社会的にも宗教的にも、自己完結的な単位として理解されています。シマは地縁・血縁の紐帯で強固にむすびついた村人たちの住む内なる世界、小さなコスモス（宇宙）としての性格をもっているともいわれます。シマはそれぞれに村落創立の伝承をもち、共有の土地を耕し、祖先神や超自然を崇拝する聖域を中心に内部的連帯をつよめていき、人びとはシマ毎に微妙に違う方言を話し、伝説と歴史的にあたえられた社会的性格も共有するようになりました。沖縄のシマという言葉は内部的結束への愛着、生れた土地への

執着心のシンボルとなっています。シマウタ（島歌）は各土地の民謡ですし、シマザキ（島酒）は村々の地酒です。幼名または童名（ワラビナー）は別にシマナともいわれ、地域の言葉はシマクトゥバといわれます。沖縄の文化は、そのようなシマ毎の多彩な文化の集積である、とさえいわれます。

こうした反面、沖縄の人びとのシマへの拘りはシマの外部にたいする排他性とむすびつく可能性も秘めているようで、自分たちのシマをワッタァ・シマ（我が村落）といい、他の村落をタシマ（他島）といい、それらの人たちをタシマンチュと称んで、シマンチュ（我が村落の人）と峻別することがあります。

一方で排他的ではありますが、シマの団結・協力は強く、同一村落の者同士の紐帯は強固です。沖縄県内各地には集落毎に祭祀が多いことで特徴がありますが、それぞれの集落で独自の祭り、独自の行事をもっています。たとえば本島北部を中心として各地でおこなわれるアブシバレー（畝払い）は水田の害虫駆除を集落で一斉におこなう祭りです。国頭地方（ヤンバル）の安田・安波をはじめとするシマでさかんなシヌグ・ウンジャミなどは、海神祭です。シーミー（清明祭）は中国から伝来した祭祀ですが、家内・門中一同が揃って祖先の墓に詣で、墓の前に集まって供え物をし、ご馳走を持ち寄り、三線を弾き、踊り、参加者一同で先祖と語り合い、故人を偲び合います。タナバタは本土他県の「七夕」の源流である中国のそれとも異なり、家内一同が墓掃除をする行事のことです。「お盆」になりますとエイサーという盆踊りが、シマのなかの道を練り歩きます。青年たちはシマ毎の伝統的な衣裳に着飾って太鼓を叩いて踊りますが、こういうときには、本土他県に出ている若者たちが還って来て、盆踊りに参加します。沖縄本島中部地区はエイサーの盛んなところで、旧盆には沖縄市の総合グラウンドで「エイサー大会」が開催されますが、それこそシマ毎の衣裳をこらしたエイサーの乱舞がみられますし、シマ毎の応援合戦もまた、たいへん見事なものです。旧盆の1ヵ月近くも前からはエイサーの練習が始まり、あちこちの海辺や公民館では太鼓と掛け声の音が響き合います。

エイサーはハルアッチャー（農民）の祭りですが、ハーリーはウミンチュ（ウミアッチャー・海人・漁民）にとっての、シマをあげての祭りです。

これは長崎のペーロン、「呱呱船競争」です。ともに中国から伝来したのですが、シマをあげての一大行事で、これまた本土他県に出たシマのニーセター（二才達・若い衆）もやって来て参加、ドラや太鼓ではやし、拍子を取り、船を漕ぎ、競争します。シマの船がスーブ（勝負）に勝っても負けても、興奮した男女は衣類を着けたまま海に飛び込んで喜び、健闘を祝し合います。

これらの祭祀・行事はシマの伝統的なものから、シマの先達・古老たちから、踊り方や漕ぎ方、衣裳にいたるまでを学びますし、古老たちは教え訓練することを義務として感じています。このことを通して、先達たちにたいする畏敬や、シマの連帯が醸成されていきます。

この4年ほど前から県も力を入れて「世界のウチナンチュ（沖縄人）大会」が実施されていますが、この催しには世界の各地に散って生活している、あるいは移民した県出身者が県都・那覇市に集まって来ます。大会が終れば、それぞれ出身のシマを訪ね、シマンチュとの交流を楽しみます。いずれも同じシマに生れ、いろいろと労苦を重ね合った者であり、シマクトゥバ（方言）、シマウタ（地域の民謡）、シマザキ（地酒）で結び合っている者同士ですから、母国（ウヤグニ・親国）である沖縄に、それぞれのシマに還って来て大い飲み、語り、唄い、楽しむというわけです。

2. 「シマムドゥイ」の移民

沖縄県民は世界を股にかけて雄飛しており、どこに行っても沖縄県の出身者に会います。1994年の夏、国際社会福祉会議がフィンランド・タンペレ市内で開催されたとき、北極圏の都市ロバニエミにまで脚を伸ばしましたが、その地の観光ガイドは沖縄県庁で公務員として働いていた人でした。暑くて沖縄で暮すことに耐え難いというロバニエミ出身の公務員である奥さんとの愛情断ち難く、この人がフィンランドで市民権をえて生活しているのです。美しくも情熱的なエピソードではありませんか。1984年にカナダ・モントリオール市内で生活する機会がありましたが、この地のレストランの経営者や郵便局員にも沖縄県からの移民がいましたよ。

これは海洋性をもつ沖縄県人だからこそ、なしていることです。首里城には中山王府が鑄造した「万国津梁の鐘」がありますが、その碑文には海洋性を大いに発揮し、海洋交易をもってクニを富

ました祖先たちの姿と暮らしが、壮大な詞をもって描かれています。1930年代の沖縄は干ばつのために「蘇鉄地獄」を経験し、多数の移民をブラジル、ペルー、ハワイなどに送り出しました。「ティガミ アトゥカラヤ ジンカラサキドゥ（手紙は後でいいから、とにかく銭を送ってくれよ）」「モーキティクイヨー（儲けて呉れよ）」という言葉が船出のときに交わして移民して行った人たちの大多数は、それぞれの国に定住することなく、シマムドゥイ（島帰り）するというのが特徴です。これが「沖縄型出稼ぎ」とか「沖縄型移民」といわれる所以です。長男を医科大学に進学させたが、学費を賄うことができない親・兄弟が移民して行った。大学も卒業し、博士号も取得し、医院の開業もできたので、移民として海外での労苦にピリオッドをうって沖縄に還って来た、という「出稼ぎ移民」の事例をかなり数多くみしました。沖縄の人たちにとって、「シマは必ず還って来るところ」なのです。

3. シマの民謡とシマ社会

沖縄は「民謡の宝庫」です。一般的に民謡といえ、古い時代から受継がれた伝統的なものですが、沖縄では伝統的なものはもちろん、「新民謡」といわれるものが年間数十曲も創作され、流行します。本土他県で唄われている沖縄民謡なるものほとんどは新民謡に入るもので、伝統的民謡はあまり他県人には知られていません。それらの古典民謡は大きく情愛歌、教訓歌、作業歌に分類されますが、それぞれのシマに残る教訓歌は逸品揃いです。沖縄本島の代表的な教訓歌は「ていんさぐぬ花」ですし、宮古群島のそれは「なりやまあやぐ」、八重山群島のそれは「でんさ一節」です。「ていんさぐぬ花」は他県人が沖縄に行って覚えてくる歌の代表的なものです。「ていんさぐの花（ほうせんかの花）は爪先にマニキュアのように染めるけれども、親の教訓は心に染めるものだ」という歌意です。「満天を彩る群星（ムリブシ）は数えようと思えば数えることができるけれども、親の教訓は数えることができない」というものです。「でんさ一節」は八重山・石垣島の上原のシマに伝えられた長いながい教訓歌ですが、「シマムチ（村落の経営）もヤムチ（家庭の運営）も船を操るのと同じで、船頭と船子、親子が心を揃えねばならぬ」と教えています。漁民の生活に例をとって、シマとチネー（家内）とを同列において、

そのシキンヌイマシミ（世間の戒め）としての「生活哲学」を論しているのです。

古典民謡のなかで教訓歌や情愛歌と比較して、数がやや少ないのは作業歌です。しかし芭蕉布を生産する本島でも、上布を織る八重山でも、織り子が唄った作業歌があります。芭蕉の苗を植え育て、切り採り、糸を紡ぎ、布に織るまでを数十番にわたって教えています。布を織る労苦を慰めること、娘にいい寄る悪代官への憎悪を唄うのと同時に、親が子に芭蕉布（上布）を織るにいたるまでの作業工程が伝承されています。ここにも親子（娘）、家庭とシマの紐帯とが同一化され、祖父母・母・子・孫とのあいだに慈しみと畏敬の念が流れています。

4. シマクトゥバに表出されたシマ社会

沖縄方言で「驚いた」とか「たいへんだあ」というとき、「アキサミヨー」とか「デージナツク」とか、いいます。その最大級の表現は「ヤマチチツチョンドー（山木切っちょんどー）」といえます。これは「シマの公有林の樹を切ってしまった」という意味です。まあ、「入会権」を犯してしまった、そうなれば「打ち首」になってしまうわけで、文字通り「生死にかかわる一大事」です。ここにはシマの共有物を命よりも大切にするという観念、あるいは自分の落ち度でシマに迷惑をかけてはならないという観念、シマの連帯・紐帯の強さが、こうした言葉に表出されているといえましょう。

沖縄では初対面の人に「あなたの生れたところは何年生れですか？」と聞くことは、さして非礼とは意識されないどころか、一種の生活の知恵として考えられているようです。「スージ（道）が違えばクトゥバが違う」といわれる沖縄です。最初のところで触れたように、シマは独自の方言をもっており、道が一筋違えばシマクトゥバが違いますから、相手と話すときに使う言葉を選択するうえで、どこのシマで生れたかを知ることが大切なことなのです。北部方言が話せない南部のシマンチュは古代京都方言に比される首里方言で話せば、北部の人とも意志疎通が可能です。首里方言は沖縄で「共通語」としての役割をはたします。山原方言（北部方言）と島尻方言（南部方言）、ましてや宮古方言との間では、あたかも津軽弁と薩摩弁との関係のように意志疎通が不可能なほど、相互理解の道具にはなりえないのです。

だから「生れたところはどこですか」と聴く意味があるのです。ちなみに「兄さん」は本島方言では一般的にヤッチーですが、宮古方言ではスザガマです。ですから互いにヤッチーといえ、意志疎通は容易なのです。厳密に言えばヤッチーは武家（サムレー）の言葉で、農民・漁民・商人たち、すなわち「百姓（ヒヤクショウ）」の言葉ではアフィーというように、ことは至極面倒です。

「何年生れですか？」と質問するのにも、それなりの理由があります。共通語（標準語のこと）で「あいづち」をうつとき、一般的に「ああ」とか「ええ」とかいいます。あるいは「ああ、そうですね」といいますね。沖縄では、それが単純ではないのです。目上の人にたいしては「ウーフウ」といい、目下の人にたいしては「イーヒー」というのが、礼儀にかなっています。ですから目上の人に「イーヒー」といったら、「ムヌワカランムン（常識のない者）」として軽蔑されてしまいます。男女のあいだで差異がありますが、接尾語として「サイ」とか「タイ」とかをつけることによって敬語になりますから、自分の相手が年長者であるか否かを知ることは、きわめて重要なことなのです。1～2歳ほど年齢に差がありそうに判断がつかかねているとき、相手にウンジョ（あなた様）というのも大袈裟になるし、そうかといって年長者にたいして「イヤー（お前）」とか「イッター（お前ら）」といったら、それこそ一大事になってしまいます。戦前の1940年ころ「方言札（ほうげんさつ）」というものを教室に持込まれて「方言撲滅運動」を強いられ、戦時中は方言を使った者を「間牒とみなす」として銃殺刑にあうような経験をもつために、沖縄県人は美しい、謙虚な表現としての方言を忘れさせられてしまいました。

ですから独居老人のための「友愛訪問」のボランティア活動をしている高校生は年寄りの方言を聞くことができても、方言で語りかけることができません。80歳以上の高齢者は「ヤマトウグチ（大和口・共通語）」を聞いたり話したりすることが、たいへん難儀です。世代間の意識のズレが問題になっている昨今、とくに高齢者介護の費用負担が大きな関心を呼んでいるとき、両世代間の意志疎通を図ることは重要なことです。そのためもあって、小学生のころから「方言劇」などを通じて若い世代に方言を普及する努力が特別に図られていることにも、ここで触れておきましょう。そ

これは沖縄県人のアイデンティティの確立のためにも大切な営みなのです。

5. 複合的機能をもつシマの共同店

本島北部や宮古・八重山の小地域・小地区には、いまでも「共同店」が残っています。沖縄本島での都市化現象は激しいものがあり、以前は共同店として機能していたものが、いまではスーパーマーケットがとって替わりました。沖縄では1930年代に入ってから、市町村単位に農協が組織されていますが、共同店はそれ以前から「シマ単位」に組織されてきたという特徴があります。シマの生産物を共同店が買入れ、それを山原船（ヤンバルセン、鎌倉期から唐・南蛮と交易した大型の貿易船）に載せて海路を那覇港まで搬送し、ここで販売し、利益をえます。共同店の主任は那覇で良質の商品や生活必需品を仕入れ、ふたたびシマに還って、ここで低利で販売します。そのため、いわゆる過疎地である山原（ヤンバル）地域の人たちが、本島中部の人たちよりもハイカラーであった、などというエピソードも聴きました。このようにしてシマの共同店は利潤をあげ、シマの経済力を豊かにします。共同店の経営がスムーズに利益をあげることに成功すれば、貧困なシマの少年が首里にあった県立師範学校に行くための奨学金を支給されたとか、名護市在の中等学校、あるいは遠く他県（ヤマトウ）の東京・大阪、あるいは長崎医大で勉学するための学費を支出することが可能になった、という話も聴きました。しかも、それらの奨学金は返済の必要がなく、いわゆる「出世払い」でした。それでもシマの配慮に恩義を感じるシマの若者たちは成功した後に、奨学金の数倍にも達する謝礼を一生にわたって寄贈した、などという美談が伝えられています。

共同店はこのように生産・販売・購買・流通・福祉などの複合的機能をもっていました。また情報センターとしての役割をはたしました。戦前はもちろんのこと、戦後も1972年の「復帰」のころまで電話はアメリカ軍に優先的敷設・使用権があり、シマには共同店に敷設された、たった一台の電話だけということは珍しいことではありませんでした。シマンチュウが共同店所有の一台の電話を共同使用したのです。那覇市や北谷村の嘉手納にあった製糖工場などで働いているシマンチュウから、共同店に電話が入ります。主任は一度電話を切り、「電話がかかったようー」と知らせます。

しばらく後に再度、電話が鳴り、話します。ですから、よきにつけ、悪しきにつけ、シマンチュウの電話の会話と情報は共同店の主任の耳に入ります。その家に病人が出て借金で困っていると、結婚が間近かだなどということが手にとるように判り、見舞いや祝いがシマをあげてされることになります。

共同店主任はシマの株主総会で選出されます。才覚のある主任を育て推薦するのは、すでに主任を経験したシマの長老です。シマンチュウの協力・協働が共同店経営を通じて促進され、豊かなシマづくりにむすびつきます。本島最北部の国頭村の安田・安波・宜真名などには現在でも大型の共同店が残っていて、ガソリンの販売までしているくらいです。一般的に「タテ集団」のもつ有益な役割を喪失している日本社会ですが、沖縄ではシマの共同店のなかにも、それが残存・維持されているのです。

6. 豚と山羊とシマ社会

沖縄県人は、むかしから豚料理を、よく食べて暮してきました。豚は脚の爪の部分を除いて、およそ全部食べ尽されます。他県では豚の腸などは捨てられてしまうか、場末の飲み屋で「もつ煮」として供されますが、沖縄では「ナカミヌ ウシームン（内蔵のお吸い物）」として、高級料理店でも供されます。よく洗い、レモン酢でしめてと手数がかるものですが、たいへん美味しい香り高い料理です。またヒージャー（山羊）は、刺身でも汁物にしても食べます。癖のある、きつい匂いがして、とても食べられないという人もあります。しかし山羊料理は、なにか「こと」があるときなどには「ヒージャー会」がシマや職場単位、あるいは親戚単位（門中・ムンチュウ）で催され、大勢で食べます。しばらく前までは選挙が近づくと、相手陣営の「ヒージャー会」に監視の眼が光る、ということもありました。

一軒の家で豚や山羊を屠殺しても、かなり大家族である沖縄でも、とても全部は食べ切れません。豚などはマースジシ（塩漬け肉）といって、上等の豚肉を塩で漬けて保存されました。これは酒の肴としては逸品です。家で作った豆腐も、暑い沖縄では保存が効きません。いろいろと工夫をこらし、トーフヨー（豆腐チーズ）をつくります。これらは宮廷料理としても逸品で、高価ですが、やはり個人の家だけでは余ってしまいます。ですか

ら、シマの各家に分けて食べてもらいます。別の家で屠殺したときには、屠殺した他家がシマの他の家々に分配するわけで、こうして「料理が縁で」シマの連帯が、いっそう強化されます。もっとも、いまは個人宅での屠殺は違法ですから、こういうことは昔のことではあります。

7. 「戦果」までが互助の品に

沖縄戦が終ってから、沖縄の人たちは無一文になり、「ゼロからの出発」はアメリカ軍のための「軍作業」の使役に出て働くことから始められました。通貨のないときですから、賃金は軍の物資が支給され、これで食生活を維持しました。初めのころの軍用トラックの運転手は、まだ独立をはたせないでいたフィリピンの傭兵でしたが、次第に沖縄の人たちにとって替わられました。このころの興味深いエピソードが、軍作業を経験した世代に語り継がれています。沖縄本島の最も狭い、くびれた東海岸に東恩納（ヒガオンナ）というシマがあります。ここの急勾配の坂を登って行くと、西海岸の仲泊（ナカドマリ）に出ます。この坂を人びとは「戦果ビラ（坂）」と称びます。東海岸から西海岸のアメリカ軍基地に行く軍用トラックの荷台には、野戦用食品の缶詰が満載されています。運転する人は沖縄県人で、荷台に乗っている陸仲仕（おかなかし）も沖縄県人です。この坂にさしかかったトラックがスピードを落したとき、荷台の缶詰の函が一斉にシマに落されます。シマンチュは「待っていました」とばかりに、缶詰の函をテント（家が戦闘で焼かれてしまっていたので、人びとはアメリカ軍の野戦用テントで暮らしていた）に隠匿します。シマンチュは、それをシマンチュで分配して空腹を凌いだといいます。戦闘がおこなわれていたころ日本軍の兵士は、アメリカ軍から武器・弾薬・糧沫を盗んで闘いました。これを軍事用語で「戦果をあげる」といいましたが、この言葉が戦後の民間人のあいだに残りました。そして、ここを「戦果坂」と称ぶようになったのです。生活の苦しさがなせる悲劇的で、喜劇的なできごとが、アッケラカンとした海洋性をもつ沖縄の人たちのなせる技といえればそれまでですが、とんだ「戦果物語」も、盗品をシマで分配されたとなれば、これまた「シマ社会の互助行為」として、なんとも救われる思いがし、許されることでありましょう。

8. シマの歴史と文化の伝承

沖縄県人のアイデンティティの問題に関連して、1960年代から各市町村や字史の編纂などが積極的に取り組まれています。そのような地域史編纂事業に触れないわけにはいきません。そして沖縄では、不幸な戦争で古文書や第一次資料が灰燼に帰してしまっていますから、地域史の編纂には苦労がともないます。そこで「地域史誌編纂協議会」という組織が県や各市町村などの担当者を集めて経験交流をし、科学的検証にたえうる地域史づくりに工夫をこらしています。浦添市・市史編集委員会では市史編纂にあたって「シマ語れ一会」を組織しました。それは沖縄戦最大の激戦地だった中部戦線の浦添市ですから、第一次資料も参考資料も失われてしまっています。往時のシマの地形も一変していますし、シマの姿も若い者たちには判りません。ましてや若い世代の者にはシマの慣行など知るよしもありません。そこでシマの古老たちに集まってもらい、シマの今昔について多方面から話し合ってもらいました。こういう方法は歴史学のうえではOral Historyという方法ですが、この方法では必ずしも正確を期し難いものですから話し合いを重ね、関係するシマや市町村・県などの資料と丹念に突き合わせるという作業がおこなわれました。このような努力を蓄積して『浦添市史全7巻』が編纂されたのです。

那覇市の首里は中山王府があった1879（明治12）年まで王城の地ですから独自の伝承がありますし、その数や範囲も広範にわたっています。しかしそれらを知る人たちは戦争で生命を失ったり、その後に亡くなったりで、それらの伝承が容易ではありません。首里王府に伝わった「おもろ」を吟じることができる91歳の人が、特別養護老人ホームで生活しておられることが判明し、おもろをテープに収録することができました。戦前から東京で教員をしておられた老婦人が、首里に伝わっていた「踊合（ウドウエー）」という別離の歌を唄うことができるということが判り、その曲を録音・保存できました。これは大きな文化的貢献ですから、2人の古老は文化功労者として、県から表彰されたということです。

これらのことを含めて考えさせられることは、沖縄県下の各市町村やシマには、かつて学校の教師をしたような人たちなど、数多くの「郷土史家」といわれる人たちが存在することに驚かされます。沖縄戦の体験者は、県民の3人に1人が戦闘犠牲

者であるという沖縄県のことですから、「ウワイ スーコー（終り焼香・三十三回忌）」であった1978年以降から凄惨な戦争体験が、生き残った人たちはその固い口を開き、「戦さ世（イクサユー）」について語り始め、記録されつづけています。またハワイをはじめアメリカ各地、そして南米諸国、フィリピンなど東南アジア諸国に移民した人びとの体験も、市町村史に収録されています。それらが「生きた歴史」として残されているのです。「生き地獄」の沖縄戦の体験も、遠い異郷の地での移民体験も、それぞれのシマ社会に語り継がれ、シマの後継者たちの生き方に色濃い影響をあたえているのです。

9. 「チュクルチャー ニンダラン」

沖縄には「チュニクルサッター ニンダリシガ チュクルチャー ニンダラン」という里諺があります。「他人に苦しめられても眠ることができるが、他人を苦しめては眠ることができない」という意味です。

最近ではボランティアということばが、日常的に使われるようになったものの、しばらく前まで高齢の人たちのあいだに、この外来語には多くの誤用がみられたものです。沖縄では一般的に外来語をシマクトゥバに昇華してしまう「したたかさ」がありますから、他県のように誤用して「ボランティア」などということではなく、1974年の「復帰」直後に老人クラブの女性指導者層などは「ティガネー（手叶・手伝う）」とか「カシー（加勢）」とかいう方言を使っていたのを知っています。ティガネーには「柵を設けて弱いものを囲う」という意味があり、カシーは文字通りの「加勢」です。「援助」です。さきにあげた里諺やティガネー・カシーという日常用語に表出されるように、誰か困っている人がある場合、「なにはともあれ、手を差しのべる」のです。

「復帰」直後、まだ沖縄の地理に詳しくなかったぼくは、バス・ターミナルの雑踏のなかでバスの選択に迷い、「このバスは勢理客（ジッチャク）に行きますか」と近くでバス待ちをしているお爺さんに尋ねたところ、彼はやって来たバスに飛び乗るようにして、運転手に方言で「これは勢理客に行くかね」と聞いて呉れて、列の後ろのほうでワジワジ（イライラ）しているぼくに、「すぐ後ろから来る25番のバスに乗りなさい。銀色のバスだよ」と教えて呉れましたので、その親切さに驚

かされたものです。バスの運転手にしても、前方から手を挙げて「待ってください」と合図してくるお嬢さんを、ことさら我慢するふうもなく発車を見合わせますし、バスを待たせながら急ぐでもなく、ゆったりと歩いて来るお嬢さんが乗車するまで待っているという風景に驚嘆したものです。ヤマトウ（大和・他県）の都会などでは、とても待つては呉れませんし、待たせながら急ぐこともなく乗車しようものなら、運転手の罵声を浴びるのがオチでしょうね。

このように高齢者や障害者、また困難をかかえている人にたいして、損得をさしおいても手を差しのべるのがウチナーンチュ（沖縄人）で、こういう風景は、きわめて日常的にみられることです。

最近では「バリアー・フリー」などといい、あらゆる生活・環境条件のもとで困難に直面している人の困難を除去し、援助するという理解と行為が浸透するようになりましたが、沖縄では、このバス・ターミナルのエピソードが物語るように、ことさら新しい生活行動ではなく、きわめて「当然なこと」なのです。沖縄のシマ社会では、ことさら福祉などという観念ではなく、ティガネー・カシーが伝統的生活意識として息づき、根づいているといえるようです。

さて美奈さん——、いろいろと書きましたが、沖縄の人たちの心の温かさや協力・協働がなぜ強いのかについて考え、主として「シマ社会」との関係で考察してきましたが、これであなたの疑問のすべてに答えることができたか、どうか、それは判りません。

沖縄の地域文化は「複合性」をもっています。ですから「シマ社会」との関連からばかりでなく、周囲を海に囲まれた沖縄独自の「海の観念」や「ティダ（太陽）信仰」「祖先のおわします根所（ニーンジョ）」「幸福・豊穡をもたらす霊力（セジ）の源泉地」という観念から生れたとされる「ニライ・カナイ信仰」、天上界から幸せをもたらすとされる「オボツ・カグラ信仰」などの自然信仰の影響についても触れなくては、不十分でしょう。さらに中国から直線的に、あるいは朝鮮半島を経由して伝わった儒教道徳を、近世沖縄社会（中山王府の時代）に具体化した具志頭親方文若・蔡恩（グシチャンウエーカタ ブンジャクサイオン・彼の王府における職名と唐名 [カラナー]）が編纂した『御教条』の決定的な影響、さらに「御万人（ウマンチュ・民衆）」の日常生活

のなかで生きつづけ、シマ社会で教育的影響力を行使している里諺などにも触れなければ、沖縄の人たちの協力・協働の「複合的要因」を解明し尽くすことは不可能でしょうから、それらについてはまた考え、書くことにしたいと思います。ご自愛ください。

参考文献

1. 沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典』、沖縄タイムス社刊
2. 琉球政府文化財保護委員会監修・真栄田・三隅・源編『沖縄文化辞典』、東京堂出版刊
3. 伊波譜猷著『古琉球』、角川書店刊
4. 喜舎場永珣著『八重山民謡誌』『八重山古謡』、沖縄タイムス社刊
5. 佐々木信綱・外間守善著『おもろさうし』、日本文学大系18、岩波書店刊
6. 沖縄民謡研究会編・刊『沖縄民謡大全集』
7. 大城学著『沖縄新民謡の系譜』、ひるぎ社刊
8. 安仁屋政昭著『共同店の研究』、沖縄国際大学南島文化研究所紀要『南島文化創刊号』所収
9. 古波蔵保好著『料理沖縄物語』、朝日新聞社刊
10. 浦添市教育委員会編『浦添市史全7巻』、浦添市刊
11. 沖縄市教育委員会編『仲宗根山戸日記（全4巻）』、沖縄市史資料集、沖縄市刊
12. 具志川市史編纂室編『明治の具志川を語る証言記録集<明治編>具志川市史編集資料 1』、具志川市教育委員会刊
13. 具志川市教育委員会・市史編纂室編『前堂盛松日記（上・下）アルゼンチン・ウルグアイ移民資料 9』、具志川市教育委員会刊
14. 具志川市史編纂室編『山城文盛寄贈資料 生れじまの記 具志川市史編集資料 4』、具志川市教育委員会刊
15. 金城正篤著『琉球処分論』、沖縄タイムス社刊
16. 矢口雄三『沖縄の老人たち』、日野原重明など編著『高齢化社会を考える』、図書出版社刊・所収